

「怒るのはエネルギーいるやろ。私のいる衆議院憲法調査特別委員会で、憲法改正反対は二人だけ。四十八人相手に論戦してると、（緊張と疲れで）もの食べれんようになるんですよ」

通常国会が閉会した後の七月初旬、大阪府高槻市のカフェ。市民四十人を前に、憲法改正に突き進む二大政党との孤独な戦いをこう表現した。三年半のブランクを経て国会に返り咲いたら、護憲派は絶滅危惧種だった。そんな危機感強い。

五年前、「ソーリ、ソーリ」と小泉首相の逃げを許さない鋭い質問で脚光を浴びた。小泉改革が弱者に冷たい政治にならないように声をからして訴えたが、小泉劇場という大仕掛けの政界ドラマが進行中。お茶の間の視聴者には、ドラマに欠かせない登場人物として受け取られた面もあった。

間もなく、秘書給与詐欺事件で議員辞職、逮捕、有罪判決。釈明時の不手際も重なった。

彼女たちのストーリー

ただ、議員辞職から一年半後の逮捕劇には各界から異論もあり、国会議員の刑事裁判としては前代未聞の三万人分の嘆願署名が集まった。そんな「辻元応援団」の核に位置する地元住民を見ようと、高槻の街に出た。

炎天下の街頭演説。いつものビルケースの上でマイクを握ると、買い物帰りのおっちゃん、おばちゃんたちが足を止めた。手には、特売品のトマトやナスが入ったスーパ一の袋。「頑張ってるな」と次々声をかけていく。

日々つましく暮らすおっちゃん、おばちゃんたちにとっ

辻元 清美さん(46) 衆議院議員

ては、「偉い国会議員のセンセイ」ではない。生活の大変さをもとに分かち合う実の娘か、隣家の姉ちゃんのような存在なのだろう。

政界はいま、九月の自民党総裁選の話題で持ちきりだ。下馬評に挙がっている候補の顔ぶれを見ると、腹が立ってしょうがないと言つ。「全員が二世三世の世襲議員。江戸時代の身分制みたい」

そんな総裁候補には「庶民の痛みなんて、これっぽっちも分からない」と感じるのは、「繊維問屋のでっち奉

公」から始まった商売人の娘だったからだ。

子どものころ、父親の仕事の都合で大阪、奈良、名古屋を転居。家族四人、六畳一間の生活も経験した。しんどかった時、差別に直面する在日

の人が慰めてくれたりした。助け助けられ、ともに泣いたり笑ったりしながら、裕福ではないが懸命に生きている人と過ごしたという。

子ども心に「差別はおかしい」「平和は大切や」と思い始め、大学では平和運動系市民団体ピースボートを設立。

「目の前のことを精いっぱいやり続けることが、将来につながる」と思った。政治の世界も同じだった。一九九六年の総選挙前、旧知の土井たか子・社民党党首（当時）からの要請で出馬。二十日後には衆議院議員になっていた。

議員一年生で、NPO法や男女共同参画社会基本法、情報公開法など、共生社会をつくり行政に風穴を開ける画期的な法律を手がけた。NPO法をつくるために、自民党幹部の自宅に夜討ち朝駆けしたり、呼ばれてもいないパーティーに行つて、竹下元首相と直談判。「私はしぶといですよ。やっぱり商売人の子ですから、一度であきらめたら生

「今から思えば、あの事件がなかったら、バブルのままではイヤな政治家になっていたのでは」。届いた励ましの手紙は二万通。ほとんどが今までの仕事を評価した声だった。「やっぱりへこたれてはいかんと思った」

判決後、何をすべきか迷っていた時、友人の作家瀬戸内寂聴さんに四国お遍路の旅を勧められたが金が無かった。大阪全市町村を日帰りで歩く旅に出た。リュックを背負って歩くうち見えてきたのは、高齢者や失業者、町工場

大阪歩き庶民の痛み知る

きてかれへんと分かってた」

そして、改革を掲げる小泉政権の登場。メディア戦略を駆使する政権に対抗して、自ら激動の渦中に飛び込んでいった。

経営者ら何らかの痛みを抱えている人の姿だった。

「二ついう政策が必要だ、ここには予算を付けたらなあかん」とばかり思った。いまは自分を見つめ直さなあかん、頭から追い出そうとするけれど、無理でした」

結局、〇四年の参院選大阪選挙区に無所属で出馬。「こんな自分を受け入れてくれるのか」という不安もあったが、ふたを開けてみれば次点の七十二万票。「死んでいた辻元にブーッと息を吹き込んでくれた」ような手応えをつかみ、昨年の衆院選で返り咲いた。

珠玉のとき

どの店で何を食べようかと考えてる時は楽しいな。今日も東京からの飛行機の中で、お昼ご飯はお好み焼きにしようと決めていました。でも忙しくて食べ

「社会の悪いところをどう変えていけるか、みんなで考えていけたら」と話しかける辻元さん。返り咲いてから、テレビ出演依頼の9割を断っているという＝大阪府高槻市のカフェ・「モンス」で

